岩城　蟾居（1789～1864）

俳人。吉田の町年寄。吉田（現、宇和島市）を中心に活動した人。本名は覚兵衛。生家の岩城屋は名字帯刀を許された吉田藩の陣屋町有数の豪商で、蟾居は33歳で七代目を継ぎ、当主として町政に参画した。少年のころから俳諧に興味を持ち、大坂（現、大阪府）の淡々流の俳人・松井三津人、京都の芭蕉堂系俳人・成田蒼虬に師事したが「常に詩経と万葉集のすがたを失ふべからず」という自身の信念に基づく俳諧を目指した。当時の宗匠の在り方や月並俳諧への痛烈な批判、実景描写の重視、発句を中心に捉えるなど、子規の俳句革新に先駆けた卓見を多く遺し、江戸俳諧と近代俳句をつなぐ俳人として重要な役割を果たした。

略 歴

寛政元（1789）年３月	吉田藩の陣屋町有数の豪商・岩城屋五代目覚兵衛の次男として生まれる。
文政４（1821）年	岩城屋の七代目を継ぐ。
文政５（1822）年	三津人の死をきっかけに蒼虬の門に入る。
文政13（1830）年	蒼虬より文台（小型の桐机）が贈られる。
天保13（1842）年	甥に家督を譲って隠居する。
嘉永元（1848）年	発句集『波留冨久路』第１巻を上梓。以降、５巻まで巻を重ねる。
文久４（1864）年１月24日	76歳で永眠。墓所は宇和島市吉田町裡町の長福寺

〈関連図書〉

・吉田郷土資料研究会編『伊予吉田旧記第三輯　波留冨久路』　伊予吉田旧記刊行会　1984年

・愛媛県史編さん委員会『愛媛県史　人物』　愛媛県　1989年

・吉田郷土資料研究会編『伊予吉田旧記第六輯　岩城蟾居俳諧雑記』　伊予吉田旧記刊行会　1992年

〈主な収蔵資料〉…（P219，102）

〈ゆかりのある場所〉…（P300，146～147）